望月佛教大辭典

藏書章

第九卷

補遺 I

望月佛教大辭典

第十卷
補遺II

昭和十一年十一月　五　日　初版発行
昭和三十二年　三　月二十五日　増訂版発行
昭和四十八年　一　月　十　日　八版発行

望月仏教大辞典　第九巻　補遺Ⅰ

編纂代表者　塚本善隆
著作権所有者　沢本貫
発行者　沢本富子
印刷者　松村保
明和印刷株式会社

発行所　株式会社　世界聖典刊行協会

東京本部　東京都豊島区上池袋一―三九―十七
電話　東京（九一五）一〇七八
振替　東京四六〇〇六
支部　京都市上京区油小路一条下ル
電話　京都（四三一）〇九一六
振替　京都五〇六六

昭和十一年十一月五日 初版発行
昭和三十二年三月二十五日 増訂版発行
昭和四十八年一月十日 八版発行

望月仏教大辞典 第十巻 補遺II

編纂代表者 塚本善隆
著作権所有者 沢本貫
発行者 沢本富子
印刷者 松村保
明和印刷株式会社

発行所 株式会社 世界聖典刊行協会
東京本部 東京都豊島区上池袋一―三九―十七
電話 東京 (九一五) 一〇七八
振替 東京 四六〇〇六
支部 京都市上京区油小路一条下ル
電話 京都 (四三一) 〇九一六
振替 京都 五〇六六

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

望月仏教大辞典・補遺二巻刊行に際して

とうとう喜びのその日が到来した。先に七年の年月を費やし、幾多の難関を突破して刊行し得た「増訂望月仏教大辞典」全八巻に、新たに追加する一八〇〇項目、一三〇〇頁に三百の図版をそえた補遺二巻を完成して、恩師望月博士の霊前に捧げて報告し、待望される学界に送り出す日を迎えることができたのである。

顧みれば、この困難な大刊行事業は、かつて望月博士がしばしば経済的破局に追いこまれられたと同様に、幾度か運営上の難関にぶちあたった。殊に増補項目一千餘項を厳密な出典主義を継承して執筆完成することは容易なことではなく、編纂執筆陣と運営者側とは幾度か衝突しまた協調し、互いにはげましあい慰めあって事業を進めはしたが、終に昭和三十三年八月二十五日運営上の難局切りぬけの為に、多数の未整備増補原稿に涙をのんで、三四七項目の完成原稿をもって増補一巻を編み、一先ず約束の全八巻刊行をはたしたのであった。その時わたくしは敢て「一先ず」の語をもって、引きつづいて補遺原稿を整備充実して、必ず数年後には学界に送ることを公言した。その為に百名をこえる東西の学者から執筆の協力をいただいた。項目も保留中の七百項目余にさらに新たに千余項目を加えて、一八〇〇に増加した。文体は現代の読者のことを考えて改められたが、厳正な出典を明かにする本辞典の精神は遵守せられた。その為に、

一小項目にも執筆者の容易ならざる苦労がこめられているのである。全八巻刊行後四年半にわたってつづけてやっと完成したこの補遺二巻も、もはや訂正をゆるされない製版になってから発見される不備の生ずることも避けがたいであろうが、辞典編纂の苦難を十二分に体験してこられた故望月博士は、これでもきっと喜んで下さることと信ずる。そしてわが望月仏教大辞典は、日進月歩の学界と共に補正され成長をつづけて、永遠に生きる大辞典でありたいと念願する。

ここにわたくしは、別項に記されたような多数の執筆協力の諸学者に改めて深い謝意を表する。殊に、長年にわたって編纂専従の任に当られた大類学兄等の筆につくし難い労苦に対して、またこの事業の為に莫大な経済的犠牲をはらいつつも今日の完成まで運んで下さった世界聖典刊行協会、すなわち今や鈴木学術財団として西蔵大蔵経百六十八巻の公刊をはじめ幾多の業績貢献をもって新しくふみ出している財団の当事者に対して、心から感謝する次第である。

昭和三十八年二月十五日

京都国立博物館にて

塚本善隆

望月仏教大辞典・全十巻の出版を完成して

思うに昭和二十四年鈴木大拙博士の発願のもとに、その学徳を中心に世界聖典刊行協会が結成されて以来、十有余年の間、同協会は「梵文華厳経」「英文法然上人伝」をはじめ幾多の仏教関係学術書の刊行と普及に微力を尽して参りましたが、その中心事業は「望月仏教大辞典」の増訂版の整備と増補の編纂・続刊にありました。幸いにして、大方の御賛同と御支援を得まして、昭和三十三年八月に一応全八巻を以て増訂版の刊行を完了することができました。その際の筆舌に尽し難い謝意は、第八巻（増補）に寄せた序文に披瀝させていただきましたが、仏恩の宏大なるにただただ感謝の合掌あるのみでした。その間、これと並行して同一の趣旨と構成のもとに財団法人西蔵大蔵経研究会を設営して、画期的大事業でありました「影印北京版西蔵大蔵経」百五十一巻の大出版を果すことができ、さらに昨年に於てその続篇として「宗喀巴全書・章嘉全書」十三巻、「総目録・索引」四巻を公刊することを得ました。引続いて、宇井伯寿博士の「梵漢対照菩薩地索引」をはじめとする学術書類の刊行および文化委員会を中心とする研究活動によって、一途に学界に寄与することのみを念願して参りましたが、昨年一月に同研究会は発展的解消を遂げて財団法人鈴木学術財団として新しく発足し、目下「荻原梵和大辞典」再編纂の着手をはじめ、幾多の貴重な研究活動が実施されつつあります。

しかも、前記第八巻序文にて御約束しましたように、世界聖典刊行協会の最終事業としての「望月仏教大辞典」の第二、第三の増補の編纂・刊行の準備も、その後引続いて鋭意努力を重ねて参りましたが、ここに満四年半の歳月の辛苦を経て補遺二巻の完成を見るにいたりました。顧みますれば、幾多の紆余曲折を経ながらも、十一年半の長きにわたってこの難事業を達成する運びにいたり、今これを世に送り出す時点に立つことを得まして、私個人の感懐も無尽なるものを禁じ得ません。これはすべて、未熟なる私を終始鞭撻督励して下された鈴木会長をはじめとする当協会並びに鈴木学術財団の役員各位、文化委員諸師の御厚志によるもので、下根の身にも仏恩の御加護の無量無辺なることを、今さらながら痛感恐懼している次第であります。この感動と報恩を契機に、今後なお一層の努力を積みまして、いよいよ斯界の御要望と御期待にそい奉ることを確約申し上げる次第です。

最後に、この補遺二巻を含む全十巻を謹んで故望月信亨博士の御霊前に供え、これを大成するにいたらしめた編纂代表者塚本善隆先生、金山正好・故土田勝彌両先生、編纂主任大類純先生をはじめ、多くの努力を寄せられた関係者各位に対してここに厚く御礼を申し上げる次第であります。

昭和三十八年二月十五日

財団法人 鈴木学術財団　専務理事
世界聖典刊行協会　常任理事
沢本　貫

編纂のことば

いわゆる「望月辞典」という通称のもとに、インド学・仏教学をはじめ、広く東洋の宗教・思想・文化の研究者には座右の文献として重用されてきた「望月仏教大辞典」は、望月信亨博士の三十年に及ぶ彫心鏤骨の編纂に成り、昭和初期いらい斯学に従事するものに不可欠の利便を提供してきたことは、改めてここに贅言を要しないことである。しかし、博士が昭和二十三年に入寂されてからも、不幸な戦争中の学問の不毛空白を埋めようとする熱烈な斯学の研鑽・発展に伴なって、改訂補筆すべき幾多の問題と、増補拾遺すべきなお数多の項目のあることが痛感せられ、それら遺漏項目の新設を要望する声が高くなった。その結果、昭和二十九年より同三十三年にいたる「本巻」全五巻の増訂版の刊行となり、さらにその間に「年表」「索引」に整備を加え、昭和三十三年には念願の「増補」一巻を上梓するにいたって、一先ず全八巻をもって江湖にまみえたのであった。この間の消息については、編纂代表者塚本善隆博士の増訂版再刊序（第一巻）および増補序文（第八巻）に委細が記されている。

当初に於て、増補は一千余項目を集録して全二巻ないし三巻をもって刊行される予定のもとに編纂計画が進められてきたが、主として運営上の事情によって、前一巻（増補・第八巻）と今回の二巻（補遺・第九巻、第十巻）の分割出版を余儀なくされた。しかし、両者の間に経過した四年半の歳月は、却って項目

の大多数の増設と意欲的な編纂方針の確立を具現することを可能ならしめ、兎も角ここに全三巻をもって完成し、同時にこの「望月仏教大辞典」も全十巻による最終完結を見るにいたった。

今回「補遺」二巻の中に収載された項目の中には、既に「増補」刊行の前後に於て脱稿用意されていたものも含まれ、従って編纂方針の新しい変化と読者層に現に生じつつある受容能力の時代的限界などの諸点から、原稿記述上の文体・表記法・制限漢字等の統一の問題に関しては、各項目ごとに若干の懸隔・異同の生じたことはやむを得ぬものがあった。しかしながら、ただ画一的にこれらを規制統一するの愚と無味と危険をおかすことなく、厳密な典拠主義という当辞典の根本態度を失わぬ限り、執筆者の個性ある姿勢と責任ある記述を保存することに努めた。望月博士亡き後に、博士の遺志を体して、しかも現段階に要請され、現世代に即応する辞典を編纂・刊行するには、おのずから博士自身の統制による編集成果とは性格を異にすべきことを感じたからである。従って、記載内容の検討を主とし、統一の点検については一項目内に於て矛盾や不体裁の不都合が生じることを避けるにとどめた。

また、若干のヒンドゥー関係の項目、最少限度の西欧インド学者名（第八巻に一部収録）などの、いわば仏教辞典当面からすれば第二次的ともいうべき項目類を特設収録したが、これは申すまでもなく、新らしい段階に於ける仏教学の研究に必要な関連項目を挿入することによって、比較参照の便宜が僅少なりとも兼備されることの重要性を感じたからである。辞典の生命の一つは、一項目を読むことによって当該の問題を理解処理するにとどまらず、必要関連する問題の所在を確認することにあり、またその使命の一つは、読者の無意味な労力を避けることにある以上、類書の少ない現段階に於ては努めてその掲載を実現するこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

とが必要であるからに外ならない。しかし、望月辞典に特有の性格と様相のもつ歴史性、および仏教辞典に当用せられるべき範囲を大巾に逸脱することを恐れ、これら関連項目の記述内容は最少範囲にとどめ、インド学の専門分野に属すべき事項は一切省略して焦点の散逸することを防いだ。また同様の立場から、参考文献の掲示も第一次的資料・文献にとどめて、書誌の拡大を避けた。

なお、当辞典は成立の当初に於ては仏教教理を中心とした小項目主義であったが、補遺二巻には大項目主義編纂に於て包含されるべき性質の若干項目を収容した。これも、いわゆる「事典」に相当する次代の仏教新辞典に於て達成せらるべき形式の試みを加味したに過ぎない。

また、本文挿入の図版が比較的少ないのは、補遺二巻の収録項目はいずれも最終的選抜になる小項目が主体であるため、図解のきわめて困難なもの、および図示すべき範疇が本巻に既出の関連項目の図版と重複をきたすものが少くないことに原因する。

補遺二巻の原稿執筆に協力をいただいた諸先学（五十音順・敬称略）は左の多数に上った。

青江舜二郎　浅井円道　天野宏英　荒井貢次郎
安藤更生　石上善応　石川良昱　石田瑞麿
伊藤真徹　伊藤唯真　稲津紀三　牛場真玄
瓜生津隆真　大山公淳　大類純　小笠原宣秀
尾上寛仲　小川弘貫　荻須純道　小沢勇貫

小野塚幾澄　鏡島元隆　香川孝雄　柏原祐泉
香月乗光　勝又俊教　金岡秀友　金山正好
兜木正亨　鎌田茂雄　紀野一義　木村日紀
雲井昭善　久保田正文　黒丸寛之　光地英学
三枝充悳　佐々木教悟　佐藤賢順　佐藤達玄
佐藤良智　佐橋法龍　三田全信　塩入亮達
塩入良道　色井秀譲　篠田龍雄　篠原寿雄
菅谷正貫　勝呂信静　関口真大　善波周
平了照　鷹谷俊之　高木豊　高崎直道
高峰了州　竹田聴洲　竹田暢典　多田等観
玉城康四郎　田村円澄　田村完誓　田村芳朗
竺沙雅章　塚本俊孝　土橋秀高　津本了学
藤堂恭俊　徳岡亮英　長沢実導　中村詳一
中村瑞隆　奈良康明　西義雄　西山蕗子
乗元恵三　橋本芳契　服部正明　花山勝友
平岡定海　平川彰　藤井学　藤吉慈海
芙蓉良順　前田恵学　牧尾良海　牧田諦亮

松長有慶　松野純孝　間野潛龍　水谷幸正
水野弘元　道端良秀　村上速水　村中祐生
室住一妙　森　観濤　泰本　融　柳田聖山
山折哲雄　山崎次彦　山田一止　山本智教
吉岡義豊　芳村修基　若林隆光　渡辺楳雄

また、望月博士の膝下にあって当初より編集協力者であった金山正好氏、および畏友塩入良道・紀野一義・田村芳朗の三氏は、積極的助言をもって常に編纂に協力を惜しまれなかった。和漢語索引の語彙抽出作業は専ら水谷幸正氏の労苦に俟つものである。煩瑣な編纂実務の一切については、財団法人鈴木学術財団研究部の瓜生津隆真・山折哲雄・西山蕗子・下石純子の諸氏の終始一貫した協力躬行によるもので、また石上善応氏および校正・梵巴蔵和漢索引作製に助力された東京大学・東洋大学の大学院学生諸君の尽力のあったことも附記する。

ここに積年の当辞典編纂史に終止符を打つに当って、過ぎこしかたを回顧して塚本博士をはじめ、故望月博士門下の方々の感慨は、うたた無量なるものがあることと拝察せられる。第十巻巻頭には追悼の意をこめて望月博士の生涯を記載し、項目として巻内に収めるのに代えた。

思うに、奇しき仏縁の邂逅を得て、この重大編纂事業の最終責務を全うし得たことは、ひとえに上掲の多数の同志の方々の熱意あふれた協力のたまものであり、ここに謹んで深甚の謝意を表する次第である。

終りに、編纂代表者塚本善隆博士をはじめ鈴木学術財団文化委員会を構成する干潟龍祥・山口益・金倉円照・有賀鉄太郎・辻直四郎・上田義文・長尾雅人・古田紹欽・羽田野伯猷・中村元の諸先生の御教導と御懇情に対して、衷心より深謝を捧げる。

附記　当辞典全巻の索引は、第七巻「索引」に所収の和漢語索引・梵語索引・巴利語索引（自第一巻至第五巻）、第八巻「増補」に所収の和漢語索引追補・西蔵語索引（自第一巻至第五巻）および和漢語索引・梵語索引・巴利語索引・西蔵語索引（第八巻）、第十巻「補遺Ⅱ」に所収の和漢語索引・梵語索引・巴利語索引・西蔵語索引（自第九巻至第十巻）の三巻にわたって散在しているため、利用者に少なからぬ不便を与えてきた。これも長年月にわたる本辞典の追補編纂の成立史上やむをえぬ措置の結果であったが、ここに全十巻完結を契機に、将来第七巻「索引」を増刷する機会に於て、これら全索引を第七巻の一本に集録して整備することを予告しておきたい。

昭和三十八年二月十五日

編纂主任　大類　純

望月信亨先生について

望月信亨先生は、昭和二十三年七月十三日、釈尊と同じく数え年八十歳をもって示寂大往生を遂げられたが、その生涯は徹頭徹尾日本における大乗仏教の宣揚とその学術の振興研鑽に寧日なく終始されたのであった。学界、教界、宗門の各界にわたって要職を歴任し、教化活動に尽瘁し、有能傑出した数多の子弟を養育し、その功績・影響の甚大なることは筆舌にはとうてい尽しがたいものがある。

先生は、「自叙伝」と題してみずから生涯の概略を口述筆記せしめられ（昭和二十二年九月六日述了）、それによってわれわれは、淡々と語るなかにも来しかたを回顧するきわまりない感慨と、紙表ににじみ出る労苦の怨慌たる一半を識ることができるのである。そのなかでもとくに、「予の畢生の事業として前後三十年の長きに亘って、其の身命財を傾注した『仏教大辞典』の編纂は、『法然上人全集』を出版した年

の秋に其の端緒を持つものである。即ち明治三十九年秋、云々」と書き起されて、つぶさにその経過と苦難の次第を書き綴られているのが『望月仏教大辞典』の編纂史である。これはまさに文字通り、生涯の大事業、難事業で、公私にわたって錯綜継起する激務繁職のなかにあって、困苦欠乏に耐え忍んで敢行踏破した難行道の生きた記録であって、まことに襟を正さずしては読むことのできないものである。

先生が他界されてからも、その辛苦と学殖の結晶としての『望月仏教大辞典』は斯学の最高権威としてあまねく後学を裨益してきたが、昭和二十九年から三十三年にわたって世界聖典刊行協会において増訂版全八巻としてこれを整備刊行した。いまここに、さらに「補遺」二巻の編纂を完了して、全十巻をもって完結公刊するに当って、望月信亨先生の生涯の略年譜と研究著作を載録して、末長くその偉徳と業績を偲ぶよすがとしたいと思う。

なお、先生を追悼する記念出版物としては、三回忌を記念して「望無雲遺芳」（前記「自叙伝」もこの中に所収、金山正好・香月乗光編、望月博士記念会発行、昭和二十五年七月二十五日）、七回忌を記念して「仏教文化研究第四号・望月信亨先生記念号」（仏教文化研究所発行、昭和二十九年七月十三日）、十三回忌を記念して「望月信亨博士講述、法然上人とその門下の教義」（諸戸素純・香月乗光・藤堂恭俊編、昭和三十五年六月十日）が、門下高弟のかたがたの至情によって上梓頒布された。

財団法人　鈴木学術財団研究部内

「望月仏教大辞典」編纂部

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com